

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

1. 近代の思想状況と自然神学
2. 自然神学の新しい動向
3. 形而上学批判と形而上学再構築

3-1: ハイデッガーと解釈学 7/16

3-2: ホワイトヘッドとプロセス神学 7/23

**Exkur:** 人文学の新しい可能性。科学技術の神学にむけて。

## &lt;前回&gt;マクグラス

## A. 自然神学とコミュニケーション合理性

1) 自然神学は異文化に対する弁証（古典文化への弁証）と異端に対する論駁（教会に対する教義学）という二つのフロントにおいて成立し——「二つのフロントの戦い」（ibid., p.199）——、これらを相互に関連づけている神学的思惟である。

2) 自然神学は、弁証と論駁という他者とのコミュニケーションにその成立の場を有しているものであり、自然神学は、この意味において、キリスト教思想のコミュニケーション合理性の問題と解することができる。

## B. 自然神学と伝統特殊的合理性

## (1) 普遍主義とは何か

ティリッヒとブーバーの場合（40年にわたる交流を振り返りつつ、ブーバーを偲んで書いた文章の一節）。具体的な普遍主義 (Dieser konkrete Universalismus)。

↓

いわゆる啓蒙主義的な合理性・普遍性とは別の合理性・普遍性の可能性。

## (2) A. E.マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』

教文館、2011年。

## 自然神学の射程

2. 人間性の内部にはその深みに、事物を理解し、生命の組織内にパターンを見いだそうとのあこがれが存在している。自然神学は、それ独特のアプローチを採用してはいるものの、理解するというこの一般的な人間の企てに属している。
5. 自然神学はまた、意義の問いに注意を向けるのである。

→真理・善・美を包括する合成概念

## 啓蒙主義批判の系譜

6. ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703-58)
7. ロマン主義の台頭は、啓蒙主義と結びついた自然への美的また情動的には薄められた応答に対する文化的反発という一面ももっていた。キーツの見解によれば、自然は人間から情動のかつ知的な応答を引き出す。この情動的で知的な応答は、事物を理解しようとする欲望を含むとともに、それを超えて、畏怖、賞賛、上昇、恐怖といった経験へ広がって行く。
9. 自然神学はさらに豊かで包括的な自然的秩序に対する人間の応答の範囲を表現できるということなのである。

## 自然への包括的アプローチと無神論への応答

## キリスト教自然神学の伝統とその再建

12. 真理、美、善という概念的に相互に連結された諸観念が、啓蒙主義に先立つキリスト教神学において、古代にその起源をもつ。

中世盛期には、「知性的美」という考えがキリスト教的な実在観の重要な局面を表現する仕方であると見なされていた。創造の神学は、ウンベルト・エーコが「宇宙について的一切善性的見方 (pancalistic vision)」と名付けたもの。「知性的美の感覚」

19. この構想がこれらの諸観念に一定の概念的安定を与える神学的枠組みを提供する。

「救済の経緯」というきわめて重要な考えは、世界には明らかに部分的な非合理性、醜さ、悪が存在しており、また世界の合理性、美、善について知られうるものに対して人間が適切な応答に失敗しているということについて、少なくとも説明の一端を提供するのである。

### 真理、自然神学と他の宗教的伝統

20. キリスト教的伝統の内部から、共通の人間の知性の展望を示し探求するための出発点を提供する。

自然神学はキリスト教的伝統に特有なものではあっても、普遍性の憧れを有している。伝統特有ではあるが伝統を超えた合理性を具体化する。

→ キリスト教とそのライバル双方についての洞察を与える。

これらは普遍的な仕方では受け入れられている基準によって証明されているわけではない。そのような基準は存在しない。

キリスト教自然神学はメタ伝統的装置として機能する。

啓蒙主義的な「伝統超越的な合理性」→ 伝統特有の合理性

→ 伝統特有で伝統超越的な合理性

a tradition-specific yet trans-traditional rationality

21. 十全な自然神学

トールキン：すべての宗教と世界観は神話（実在を説明する試み）に基づいている。すべての他の神話はその近似に過ぎないような現実的な神話である。

ルイス：キリスト教と他の宗教との類似性は、実在についてのキリスト教的見方の包括的性質に基づく。

福音の大きな物語にその完成を見出す。

23. キリスト教的伝統外部における世界への部分的かつ断片的であるが、しかし現実的な洞察の存在を肯定できる。キリスト教的伝統はその十全な開示である。

→ 宣教論へ：

### (3) 自然神学と意味論

25. Alister E. McGrath, *Surprised by Meaning. Science, Faith, and How We Make Sense of Things*, Westminster / John Knox Press, 2011.

26. 宗教と文化、宗教的多元性と文化的多元性を貫く問いとしての「意味」

↓

意味論からコミュニケーション合理性の解明へ。

### (4) 普遍性と終末論

27. 啓蒙的合理性・普遍主義は終わったのか。

↓

歴史の中の合理性・普遍性：伝統特殊の

伝統特殊であっても普遍性に関与する限り、理想的発話状況の先取りが必要である。

啓蒙の普遍主義は形式的に先取りされた合理性として解釈するとどうなるか。

啓蒙・カント主義

28. 一つの神学と時代的制約における三つの形態（モルトマン）

自然神学、啓示神学、栄光の神学。啓示神学は歴史という条件下での自然神学。

→ 栄光の神学は終末という条件下での自然神学。栄光の神学を先取りしその形式性を表現すると啓蒙的合理性と合致するだろうか。

### 3. 形而上学批判と形而上学再構築

#### 3-1: ハイデッガーと解釈学

##### A. ハイデッガーとキリスト教

###### (1) ハイデッガーは無神論者か？

1. Paul Tillich, "Heidegger and Jaspers," in: Alan M. Olson (ed.), *Heidegger & Jaspers*, Temple University Press, 1994, pp.16-28.

God also is a problem about which Heidegger expresses himself negatively, that is, always in terms of a question and never positively. To illustrate, I remember one evening, when we were colleagues in Marburg, Heidegger presented a paper. The next morning, I took a walk with him, and he asked me what I thought about it (incidentally, it was one of the best he ever gave). To his surprise I told him, "You gave a sermon last night, an atheistic sermon, but couched entirely in the phraseology of early German Pietism." He understood immediately what I meant and accepted it. This ambiguity in Heidegger's relationship to God persists throughout his work, for his interest is not theology but ontology, the question of Being and nothing other than Being. (17)

And this leads me to my final point: When you deal with existentialists, don't go to them in order to find answers. The answers one finds in the later Heidegger, for example, do not come from existentialism but from the medieval Catholic mystical tradition within which he lived as a seminarian. The answers one finds in Jaspers come not from existentialism but from the classical humanist tradition or, more precisely, German idealism; and the answers one finds in Gabriel Marcel come not from existentialism, but from classical Catholic orthodoxy. So also the answers one might find in Kierkegaard come from Pietistic Lutheranism, and in Nietzsche, from the philosophy of life with all of its romantic ambiguities and divine-demonic dimensions. (27)

2. 辻村公一『ハイデッガー論攷』創文社、1971年。

附録一 ブルトマンとハイデッガー——信仰と思惟

一 序言。問題の説明

二 出会の時

三 出会の前

四 ブルトマンとハイデッガーとの相違と相応

五 結語。信仰と思惟

附録二 カントとハイデッガー

3. 小野真『ハイデッガー研究——死と言葉の思索』京都大学学術出版会、2002年。

ディディエ・フランク『ハイデッガーとキリスト教』萌書房、2007年。

Otto Pöggeler, *Philosophie und Hermeneutische Theologie. Heidegger, Bultmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.

###### (2) ハイデッガーと形而上学

4. Martin Heidegger, *Was ist Metaphysik?* Vittorio Kostermann, 1969.

Einleitung (1949)

Was ist Metaphysik? (1929)

Nachwort (1943)

5. O・ペグラー『ハイデッガーの根本問題——ハイデッガーの思惟の道』晃洋書房、1985年。

## 6. ハイデッガーの形而上学批判

近代以降への歴史的状況の下、キリスト教は痛烈で多様な宗教批判に直面した。近代の宗教批判としては、先ずフォイエルバッハからマルクス、フロイトへと展開する一連の議論が挙げられるが、そこには、啓蒙的合理性の立場からの形而上学批判が連動している。

<sup>(1)</sup> しかし、これが宗教批判あるいは形而上学批判のすべてではない。ここで注目したいのは、もう一つの宗教批判、つまりニーチェの宗教批判である。先の啓蒙的合理性からの批判が前近代的な伝統への合理主義的批判であったのに対して、ニーチェの行った批判は、啓蒙的理性とキリスト教的伝統からなる西洋世界 (Abendland) 総体に対する批判と解することができる。ここに近代の宗教批判の二重構造が確認できる。

このようなニーチェの思想的意義を自覚した上で、形而上学へ正面から取り組んだのが——形而上学の根拠からその克服へ——、他ならぬハイデッガーであった。ハイデッガーは、『形而上学とは何か』(Was ist Metaphysik?)の「序論」において、キリスト教を含む西洋的思惟の総体としての形而上学について次のように論じている。<sup>(2)</sup>

形而上学とは、「存在するものとして存在するものを思惟すること」(ibid., 8)であるが、それは、「存在するものを存在するものとして問うがゆえに、存在するものにとどまり、存在としての存在には向かわない」(ibid.)。したがって、「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」(ibid., 11)。この「存在するものと存在との混同」「存在忘却」(Seinsvergessenheit) (ibid., 12)において、形而上学は、存在するものの存在性(Seiendheit)を二重の仕方では表象する。つまり、一方では、存在するものの全体を、その最も普遍的な特徴の意味において(存在論)、他方では、最高の従って神的なものの意味において(神論)、と。ここから、形而上学的思惟が狭義の存在論であるとともに神論であるという二重の性格、「存在—神論的本質」を有していることが明らかになる(ibid., 19)。キリスト教的西洋世界において、ヘブライズムとヘレニズムが緊張関係にありつつも一つの思惟世界を形成したのは、単なる偶然ではなく、いわばそれ自体が、存在の「性起」(Ereignis)、「存在の命運」(Seinsgeschick)として生起したのである。今や、ニーチェと共に、古代ギリシャを第一の元初(erste Anfang)とする形而上学的エポックは夕暮れにさしかかり、存在の命運は第二の、別の元初(andere Anfang)へと移行しつつある。

以上より、次に引用するハイデッガーの形而上学批判(『杣径』に収録された論文「ニーチェの言葉「神は死せり」」)は、<sup>(3)</sup> 西洋の思惟の総体としての「存在—神論」

(Onto-Theo-Logie) 批判であり、キリスト教的な神、とくにその強い神への徹底した批判であることが判明する。

ニヒリズムの本質とニヒリズムという出来事のための境域は、形而上学それ自身である。これは我々が、形而上学という名称で哲学の或る一定の教説のことを思わず、ましてや哲学の特殊部門にすぎないものなどは思いもせず、全体としての有るものが感性的な世界と超感性的な世界とに区分され、前者が後者によって支えられ規定される限りにおいて、全体としての有るものの根本条理のことを考える、と常に仮定してのことである。形而上学とは歴史空間のことであり、その内部では、超感性的な世界、諸理念、神、道徳律、理性の権威、進歩、最大多数の者どもの幸福、文化、文明が、それらの立て直す力を喪失して虚ろになるという事実が命運となるのである。(同書、247頁)

## 7. キリスト教思想と形而上学再考

近代以降の宗教批判は、キリスト教思想に伝統的な神理解の再考を迫るものとなった。とくに、ニーチェとハイデッガーに依拠しつつ展開されているポストモダンの形而上学批判は、キリスト教思想の脱形而上学化を促しつつある。しかし、いわゆるポストモダンが21世紀のキリスト教思想にとっていかなる意味を有するのか、また形而上学はあらゆる意味で終焉を迎えたのかは、決して自明ではない。むしろ、キリスト教思想においては、現在、脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考の試み（たとえば、パネンベルクやプロセス神学）とが交錯していると評すべきであろう。<sup>(4)</sup>

- (1) 芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第24号、2004年、1-23頁、「現代キリスト教思想と宗教批判——合理性の問題を中心に」『宗教研究』（日本宗教学会）、357号、2008年、227-249頁。
- (2) Martin Heidegger, *Was ist Metaphysik?*, Vittorio Klostermann, 1981(1950). (『形而上学とは何か』大江精志郎訳、理想社、1954年。)
- (3) ハイデッガー「ニーチェの言葉「神は死せり」、『杣径』(ハイデッガー全集 第五巻) 茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、創文社、1988年。(Nietzsches Wort » Gott ist tot 《 (1943), *Holzwege*, Vittorio Klostermann, 1980(1950).)
- (4) 芦名定道「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第25号、2005年、21-41頁。

### (3) ハイデッガーと否定神学・隠れたる神

8. 茂牧人『ハイデッガーと神学』知泉書館、2011年。

#### 第一部 ハイデッガーと神学

##### 第一章 初期フライブルク時代の神学的考察

- 第一節 若きハイデッガーの獲得したモチーフ
- 第二節 事実的生経験を取り出す態度
- 第三節 事実的生経験の考察
- 第四節 形而上学批判のモチーフとルター
- 結 び ハイデッガーの〈隠れたる神〉の思索

##### 第二章 哲学と神学—— マールブルク時代のブルトマンとの対話

- 第一節 初期フライブルク時代の事実的生の考察
- 第二節 マールブルク時代のハイデッガーのルター研究
- 第三節 「現象学と神学」における哲学と神学との関係
- 結 び

9. 「本書は、ハイデッガーの思索が、キリスト教神学を源泉にしていることを取り出すだけでなく、さらにキリスト教神学との対決をどのように展開したのかということ明らかにする。つまりここでいうキリスト教神学とは、二義的である。キリスト教神学自身の懐の深さを意味している。キリスト教神学は、存在・神・論としての形而上学に陥った自分自身を解体していく原動力を、自分自身の中にもっている。それ故ハイデッガーは、自分の思索を形而上学としてのキリスト教神学に批判的に向けるのと同時に、そのキリスト教神学解体の力をキリスト教神学自身からえている。」(vi)

10. 「神学も哲学も双方とも、形而上学批判という仕方で、形而上学の超克という作業を遂行してきた。筆者は、その作業の遂行の原動力が、実はキリスト教神秘主義の伝統の中の否定神学と〈隠れたる神〉の神学との思索に潜んでいたこと、さらにいろいろな詩人や哲学者との対決の中でハイデガー自身が、この伝統へと立ち返ることで、形而上学の超克という作業を遂行できたことを論証するつもりである。それによって、神学と哲学は、新たに共同作業のできる領域を獲得できると思われる。」(viii)

#### (4) ハイデッガーと聖書的思惟との屈折した関係

11. M・ザラデル『ハイデッガーとヘブライの遺産——思考されざる債務』法政大学出版局。  
Marlène Zarader, *La dette impensée. Heidegger et l'héritage hébraïque*, Seuil, 1990.

12. 「ヘブライの功績がかくも大量に排除されているのは、それが書き込まれる「場所」がないからではなく、そもそも初めから、それを思考することが禁じられていたからなのだ。この禁止は、ハイデッガーの仕事のなかで一貫して維持される二重の還元<sup>1</sup>に依拠している。まずは(ギリシャ語で書かれた)新約への聖書の還元であり、さらに今度は、この新約のテキストが信仰(foi)の経験という純粋経験へと還元されるのである。」(8)

「以上のことから、キリスト教に関するハイデッガーの理解が帰結する。ハイデッガーによると、キリスト教はそれが有する数々の次元のうちの一つによって全面的に解明される。一つは信(思考の秩序とは無縁だということが信の特徴である)であり、いまひとつが存在神学(ギリシャ思想に還元可能なものであることがその特徴である)である。ということはつまり、キリスト教の根源的な唯一の特徴(十字架にかけられた神への信仰)はまったく思考に係わるものではなく、キリスト教を思考に係わらせる特徴はなんらキリスト教固有のものではないのだ。」(8-9)

「三つの限定」

「一」「キリスト教思想」は「西欧の意味深い構成要素とみなされることはありえない。なぜなら、それは全面的にギリシャ思想の管轄に属するものだからだ。」

「二」「逆に、聖書の思想(たとえそれが新約のそれであれ)は、いかなる意味でも存在しえない」「聖書はキリスト教における信の次元にしかインパクトを与えないからだ。西洋はしたがって、聖書的な信とギリシャ思想という二重の徴しを帯びたものとなるだろう。」

「三」「なんらかのヘブライ的出自へと遡行することは問題とはなりえない。信についても思考についても、それは問題となりえない」「西洋はキリスト教的信とギリシャ思想との二重の徴しを帯びている、と。キリスト教神学は」「これら二つのものの混合物なのである。」(9)

「聖書の宇宙の総体を(キリストへの)信というただひとつの次元に還元したがために、思考のヘブライ的源泉はハイデッガーによって無効を宣せられることのまったくない状態にとどまる。」(10)

「ハイデッガーのテキストには忘却がはらまれているかもしれないという可能性」「ハイデッガー自身がある系譜に身を置いて、この系譜だけが彼の言葉を可能にしているにもかかわらず、そのようなものとしてこの系譜が明るみに出されることはない、それが論証された場合にのみ、ここにいう忘却は確証されることになるだろう。」(13)

「ヘブライの巨大な集積について大いに注目すべき沈黙をまもったハイデッガーが、それにもかかわらずこの集積に係わっているのであれば、この係わりは必然的に秘密の係わりであり、虚偽を施された係わりであろうから、その二重の錯綜を解くことが問題になるだろう。」

二重の錯綜と言ったが、一方ではハイデガーの思考に押され旧約の遺産の刻印を示し、いま一方ではそれと併行して、ハイデガーの思考がいかにしてこの遺産を隠蔽しているかをしめさなければならないのである。しかし、こうした読解の可能性をわれわれは誰から引き出すのだろうか。ハイデガー自身からでないとしたら、誰から引き出すのだろうか。」(21)

「言語の問い」と「思考の問い」

「ハイデガーが自分自身の思考のうちで引き受けると共に、ギリシャの文献にとっての思考されざるものという位格をそれに授けたところのもの、それは別の文献の痕跡を、おそらくはまったく別の思考の痕跡をはらんでいるのではないか。それにもかかわらず、そのようなものとして、これらの文献や思考が呼び出されたことはまったくないのではないか」(23)

「いかにしてこの集積がハイデガーのテキストのうちで作用しえたのか、言い換えるなら、いかなる道を通して伝達がなされたのか、この点を示すべきであろう」、「若きハイデガーと神学との係わり、それも、フライブルク大学での初期の講義」(23)

### 13. 「歴史の領野と形而上学の領野」「二重の拡張」

「第一の拡張によって、形而上学は西洋の歴史のありとあらゆる次元をカバーするものとなり、いまひとつの拡張によって、形而上学はこの歴史の流れ全体をカバーするものと化したのだ。」(27-28)

「意味論的拡張」「語彙の変動」「存在論から形而上学への拡張」(28)

「西洋の特徴的な思考や、さらには行動のあらゆる次元を包括するもの」(30)

「ソクラテス以前の哲学者たちに認められていたような「初発の経験」を、その後の経験に蓋をしてしまうことになる形而上学との分割線は、この論考では著しくかき乱されている。」(35)

「次第次第に起源的なものを後退させていったかのようなのだ」、「凝固した形而上学の伝統からそのプラトン-アリストテレス的な創設へ、その創設からソクラテス以前の早朝へ、この早朝からついには、より秘められた黎明、「到来せざる」この黎明へと」、「ある意味ではギリシャ的なものの外に出てしまった」、「ドイツの言語の援用がより頻繁になっていく、ドイツ的なものだけが、ギリシャ的なものの彼方をなおも庇護しうる」「唯一の場であるかのようなのだ」、「起源の本質を展開させようとする場合には次第次第にドイツの言語へと傾いていった」「詩人の呼びかけ」(37)

「ギリシャ的黎明がすでに以前の特権を喪失した以上、歴史は今や形而上学とも始まる。歴史は形而上学の迷いと共に始まるのである」(38)

「最後の拡張」「地球の歴史」(42)

「三重の拡張」

存在論→西洋に固有な（思考と態度の）ありとあらゆる次元を覆うもの

→西洋の歴史全体をその創始から完成に至るまで覆う

→端的に歴史そのものへと拡張

「こうした考え方のひとつひとつは、ハイデガーがそれを捜し求めようなどとはまったく思いもしなかった場所にそれはもはや潜在的な仕方ではなく顕在的な仕方で「見いだされる」。言い換えるなら、まったく別様のテキストのうちに、つまりは聖書とその註解のうちに「見いだされる」のである、「聖書における同じ諸規定の存在がハイデガーによって見誤れているのに対して、これらの規定の聖書における所在はすでに見いだされるのみならず、長きにわたって註解を施されてきた」、「三つの例」「言語、思考、解釈」(53)

14. 「言語は、存在者が現れるための条件であり、存在者が現前のなかに出現し立ち現れるための開けなのである」(60)

「詩は言語が本質に適合したままであるような場であるから、この本質を展開させる者として詩人を規定することができる」(62)

「ハイデガー的なアプローチにおいて詩人を特徴づけている特質の大部分は聖書の予言者に見いだされる」「これこれの特質ではなく、それらの集積」、「個々の点で、ギリシャの予言者と聖書の予言者の明確な差異が確認される場合、詩人にハイデガーが与えた特徴はつねに聖書の予言者の側のものであること」

「この類似を包み込む沈黙」(83)